若葉2011　「名誉教授からの一言」

**情報社会の中で思うこと**

平成２２年を振り返ってみて、一番おきな変化は情報技術の進化と、その普及の速さ、情報化に派生した事件でなかったかと思う。日常生活の隅々までIT化が進み、いまや世界中隈無く及んでいる。私なりに、この情報社会の変化について少し整理をしてみたい。

**iPadの出現、Windowsから再びMacへ**

今の社会で、日々最も進化を続けているのが情報技術であるように思う。本年５月に初めてiPadを手にして驚嘆したのが、つい昨日のように思い出される。その素晴らしいスペックは、これまでのPCのバージョンアップとは全く異なる革命的な出来事と言える。私は、ここ７年ほどWindowsを使っていたが、再び昔使っていたアップル社製のマックに逆戻りすることにした。

iPad, iPhone４の発売に続いて、最近、スマートフォンなど類似の機器が数々発売され、PCに比べて手軽に持ち運びできることから、携帯電話端末としの標準機器となること間違いなしである。医療分野への進出も時間の問題で、病院内だけでなく、通信機能を活用した在宅医療モニターとして、役立てられ、ひいては医療構造の変化さえ引き起こすであろう。

**ウィキペディア　Wikipediaの充実ぶり**

インターネットを利用している方なら、ウィキペディアのサイトにアクセスした経験をお持ちだと思う。この素晴らしいネット上での百科事典を私はしばしば活用している。ウィキペディアは、創設されてからまだ10年を経過したに過ぎないが、毎月３億８千万人が利用いるそうだ。その数はインターネット接続環境にある全人口のほぼ３分の１に相当するという。

ウィキペディアは、商業的なウエブサイトとは全く異なり、ボランテアが少しずつ書き込んでいってできた、コミュニティの産物である。一つ検索すると、実に多彩な記事が載っているので、調べものをするには欠かせないサイトとなっている。課金も、広告もなしにここまで充実したものができるとは、創設者のジミー・ウエルズさんも予測していなかったのではなかろうか。でも、今回アクセスすると、寄付受付の画面が掲載されていた。日常的に大変重宝させていただいているサイトでもあり、すぐに振り込ませてもらうことにした。

**ウィキ（Wiki）、あるいはウィキウィキ（WikiWiki）とは**

匿名により政府、企業、宗教などに関する機密情報を公開するウェブサイトの一つであるウィキリークス（WikiLeaks）が、世界各国の外交上の機密文書を公開し、大きな話題となっている。このウィキリークスと先に述べたウィキペディアとは何のつながりもないとのことである。この“Wiki”という単語を検索すると、コンピューター用語の一つで「ウェブブラウザを利用してWebサーバ上のハイパーテキスト文書を書き換えるシステムの呼び名」ということである。ウィキウィキ（Wiki Wiki）はハワイ語で「速い、速い」を意味し、ウィキのページの作成更新の迅速なことを表している。米国の著名なコンピューター・プログラマであるウォード・カニンガム（Ward Cunningham）氏が、ホノルル国際空港内を走るWiki Wiki シャトルバスからとって、“Wiki Wiki Web”と命名したそうである。

情報漏洩と言えば、神戸のインターネットカフェから尖閣諸島中国漁船衝突事件の映像が動画投稿サイトYouTubeに流出し、政府の情報管理能力が問われる騒動があった。この事件の背景を見ると、情報の秘諾がほとんど不可能に近い状況、内容であるのに、情報統制を図ろうとする時代錯誤的な為政者の感性にただ呆れるばかりであった。情報管理能力が最も問われるはずの行政や医療分野が、守秘性を盾にして、ITを活用した情報ネットワーク・システムの普及を怠ってきたことが、今回のような稚拙な判断ミスの原因となったに違いない。実際には、情報の漏洩よりも、情報を活用できないことの方がはるかに問題が大きいと言わねばならない。

**ＧＥ、日本で医療向けＩＴサービスを「クラウド」で**

米国のGE社がいよいよ我が国の医療産業に参入するという記事が１２月１２日の日経新聞の１面トップに掲載された。グローバル企業の参入で、我が国の医療が大きく変革すること必至だ。これまでのコンピュータ利用は、ユーザーである各病院がコンピュータのハードウェア、ソフトウェア、データなどを、自分自身で保有・管理していたのに対し、クラウドコンピューティングでは「ユーザーはインターネットの向こう側からサービスを受け、サービス利用料金を払う」形になる。クラウドでは、端末機器を設置するだけで、ITサービスを受けることが可能であり、病院の規模に関わらず、医療情報システムの主流となる。医療情報の集約化が進むと、各病院の経営状態は丸裸になり、病院の差別化がより鮮明になる。経営不振の医療機関にはすかさずグローバル資本が投下され、経済至上主義的な医療への道がより加速することになろう。

**最後に**

目覚ましい進化を遂げつつある情報通信技術が、我々の日常生活を大きく変えたが、守秘性を理由としてこれまで改革を怠ってきた医療分野にも、いよいよ大改革が起きようとしている。このような環境下で、よりよい医療を提供し続けるには、医師一人一人が玉石混合の情報に振り回されることなく、自らの頭脳で情報を活用する術を学ぶことであり、医師としてのアイデンティをもつ上で一番大切なことだ。

平成２２年１２月記